

Bible Navi

第2課

人はなぜ 苦しむのか？

苦難には意味や
目的があるのだろうか？



SOS TV



世の中に、多くの聖書教材が存在しますが、
聖書の真の意味を教えている本はどれほどあるでしょうか？

Bible Navi 32シリーズは

アルマゲドン戦争、獣の像、666、
この世界になぜ苦難があるのか、偽キリストの存在、
ニューエイジ運動、イエスキリストの再臨、十字架の真の意味、
生まれ変わったキリスト者の生活、聖書の預言と世界歴史の成就、
地獄の真実、創造と進化、健康的な生活、
「アメリカが聖書に預言されているのか？」
七年の艱難は聖書的だろうか？」など、
是非知っておくべき真理を集めました。

真理を探しておられますか？
この32シリーズを通して、永遠の生命を与えて下さるキリストに
お会いできますことを祈っております。

Bible Navi 32シリーズ

編集 SOSTV Japan Mission

TEL 050-1141-2318

Mail sostvjapan@outlook.com

HP sostvj.net



人はなぜ苦しむのか？

苦難には意味や目的があるのだろうか？

Contents

第1部 苦難について聖書はどう教えているか 3

- ① サタンの挑戦としての苦難 4
- ② 気づきを与えるために臨む苦難 7
- ③ 神の栄光を表すために来る苦難 9
- ④ あなたを益するために来る苦難 10
- ⑤ より良い奉仕をもたらす苦難 13
- ⑥ おきてにそむいた結果として来る苦難 18

第2部 愛する人を亡くされた方のために 22

SOSTV案内

第1部

苦難について聖書はどう教えているか

この世になぜ苦しみがあるのでしょうか？戦争、犯罪、自然災害、家庭崩壊、自殺など、周囲を見回せば、どこからでもうめきと悲しみの声が聞こえてきます。いや、まさしく私たち自身が苦痛によって、涙の乾く日がないほどなのです。

なぜ、この世には苦難があるのでしょうか？なぜ、時には神様を真実に信じている人にさえ、苦難がやって来ることがあるのでしょうか？神様は私たち人類の苦しみについて、関心を持っておられないのでしょうか？私たちが痛む時、神様はいったいどこで、何をしておられるのでしょうか？私たちの苦難を、神様は本当に理解しておられるのでしょうか？このような疑問は、苦難と向き合う多くの人々が心の中で上げる叫びではないのでしょうか。私たちには、このような質問に対する確実な答えが必要です。

この小冊子が、人類の苦しみの意味と理由について、聖書が教える正しい解答を与えるものとなり、あなたの人生が、様々な苦難の中であって、平安と希望に満ちたものとなることを願っています。



旧約聖書に出てくるヨブは、サタンの挑戦により苦難を受けた代表的な人物です。ヨブ記1章ではサタンが天の集会に加わる場面が書かれています。その集会で、サタンは自分が地を行きめぐり、あちらこちら歩いてみたところ、神様を真心から畏敬する者をこの世で見つけられないと主張します。

「ある日、神の子たちが来て、主の前に立った。サタンも来てその中にいた。主は言われた、『あなたはどこから来たか』。サタンは主に答えて言った、『地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました』(ヨブ1:6、7)。この時、神様はサタンの主張が間違いであることを述べられます。

「主はサタンに言われた、『あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか』(ヨブ1:8)。

ところがサタンはそれに対して、ヨブが神様に仕えている理由は、神様を心から愛しているためではなくて、神様が多くの富を与えて祝福されたせいだと主張しました。つまり、ヨブが神様に仕えている理由は、自分の利己的な欲求を満たすために仕えているだけのことだと告訴したのです。「あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです」(ヨブ1:10)。

純粋な動機と良心的な確信によって神様に仕えているのではなく、神様がヨブを繁栄させておられるから、それに対する応答として、ヨブは神様に仕え畏敬しているのではと主張しました。それだから、もし神様が、今までヨブに与えてこられた祝福を取り去ってしまうならば、その時すぐにヨブは神様に仕えなくなりますよ、とサタンは訴えたのです。「しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」(ヨブ1:11)。

神様はご自身の名誉にかけて、このようなサタンの挑戦を受けられました。神様はサタンに、ヨブの命だけは助け、他のことはすべてをサタンの手にゆだねることをお許しになりました。「主はサタンに言われた、『見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない』。サタンは主の前から出て行った」(ヨブ1:12)。サタンはヨブを試みようとして、直ちにヨブへ向かいました。

災難が相次いでヨブにのぞみ始めました。突然、外敵が攻め寄せて来て、牛とろばを奪い取って僕たちが打ち殺される事件が起きました。その報告を聞いている最中に、今度は、天から火が降って羊と僕たちを焼き滅ぼしてしまったという報告が来て、その災難の知らせがまだ言い終わらないうちに、「彼がなお語っているうちに、またひとりが来て言った、『あなたのむすこ、娘たちが第一の兄の家で食事をし、酒を飲んでいると、荒野の方から大風が吹いてきて、家の四すみを撃ったので、あの若い人たちの上につぶれ落ちて、皆死にました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました。』」(ヨブ 1 : 18、19)。この突然の、とてつもない災難の知らせを、次から次へと告げに来る僕たちの話を聞き続ける、ヨブの心境はどうであったことでしょうか。

サタンは、彼のできる全てのことをやり尽くしました。サタンはヨブの財産だけではなく、子供たちさえも取り去りました。そしてサタンは、ヨブの口から神様に対する呪いが吐き出されることを期待しました。ところがヨブはサタンの期待を叶えるそのようなことをしませんでした。その代わりにヨブは「このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、そして言った、『わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな』。すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かなことを言わなかった」(ヨブ 1 : 20～22)。サタンは完全に失敗してしまい、ヨブの神様に対する信頼は証明されました。ヨブを義人であると宣言なさった神様の名誉は擁護されました。ヨブは神様から何かを受けとるために、もしくは受け取ったゆえに、神様を畏敬していたのではないという事実が証明されました。ヨブの信仰は全く純潔なものでした。

神様はヨブが純潔な信仰を持っていることをサタンに語られました。しかし、サタンは諦めませんでした。「主はサタンに言われた、『あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あなたは、わたしを勧め、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした』」





(ヨブ 2:3)。このような神様の言葉に対して、サタンはヨブが神様を呪わなかった理由は、神様がヨブに命までおびえさせるような苦しみを、許していなかったためであると言いました。「サタンは主に答えて言った、『皮には皮をもってします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかし、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃つてごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう』」(ヨブ 2:4, 5)。神様は再びサタンのこのような挑戦をお受けになりました。「主はサタンに言われた、『見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ』」(ヨブ 2:6)。再びサタンは、ヨブの体あらゆる苦しみをもたらすために地球へ下りました。人間は利己的な目的を満たすために神様に仕え畏敬しているに過ぎないという、自分の主張を立証させることがサタンの目的であったからです。

サタンはヨブに拷問の苦しみを加え始めました。「サタンは主の前から出て行って、ヨブを撃ち、その足の裏から頭の頂まで、いやな腫物をもって彼を悩ました」(ヨブ 2:7)。その時「ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の身をかき、灰の中にすわった」。そのようなヨブの姿を見ていた妻は、彼に言いました。「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい」(ヨブ 2:8, 9)。友人たちもヨブを尋ねて来て、絶望的な言葉ばかり残して立ち去りました。「考えてみよ、だれが罪のないのに、滅ぼされた者があるか。どこに正しい者が断ち滅ぼされた者があるか。わたしの見た所によれば、不義を耕し、害悪をまく者は、それを刈り取っている」(ヨブ 4:7, 8)。ヨブの友人たちが発する嘲弄やあざ笑いは、ヨブを耐え難い苦しみの中へ追い込みました。

しかしそれでもヨブの高潔な品性は揺らぎませんでした。彼は妻に次のような言葉で反論しました。「しかしヨブは彼女に言った、『あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか』。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもって罪を犯さなかった」(ヨブ 2:10)。ヨブの口から出たこの一言によって、サタンは完全に敗北しました。このような理由に基づいて、サタンはこれ以上ヨブ記に登場しなくなります。神様に対して罪を犯すよりかえって死ぬことを選んだヨブに、サタンは打ち勝つことができませんでした。「見よ、彼はわたしを殺すであろう。わたしは絶望だ。しかしなおわたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう」。「わたしは知る、わたしをあが

なう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる」(ヨブ 1 3 : 1 5 ; 1 9 : 2 5)。

ヨブは、天でサタンが神様に挑戦していた事実を全く知りませんでした。彼は、自分が試練と悩みに対してどのような態度を取るかということで、神様が勝利されるか、サタンが勝つのかという、宇宙の秩序をかけた戦いが行われていることなどいっさい知りませんでした。また、天で行われた神様とサタンとの争いを知った御使いたちが、ヨブの一つひとつの言動を見つめていたことも知りませんでした。彼が知っていたことといえば、訳もわからず次々と災難が自分に降りかかってきたという事実だけでした。

しかし彼は、自分の良心に照らして、最善を尽くした信仰の態度を示しました。彼自身に起きたことは、全く理解できないことばかりでしたが、彼は、自分が知る限りの真理の光に従って、それでもなお神様の愛を疑わず、神様を信頼して歩み、最終的に神様ご自身から、ヨブの正しさが証明されたのです。

「あなたがたはわたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについて述べなかった」(ヨブ 4 2 : 8)

苦難の中におられる兄弟姉妹の皆さん、ヨブの模範に従って下さい。ヨブは、自分の何かの罪が原因でこれらの悩みが降りかかっているのではないかということ深く思いました。しかし、自分自身が当面している災難の理由と原因を理解することはできませんでした。皆さんの苦難の原因が、皆さん自身の罪や欠点によるものではないか、深く探ってみて下さい。そしてもし、何かの特別な理由もなく苦痛や災難が降りかかっているとすれば、皆さんもヨブのように、「彼はわたしを殺すであろう。わたしは絶望だ。しかしなおわたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう」(ヨブ 1 3 : 1 5)と告白することによって、皆さんを試みて、神様に対する疑いや不満を起こさせようとしているサタンの挑戦を退けてください。

2

気づきを与えるために臨む苦難

人生の苦痛が、悔い改めなかったために、神様の裁きの結果としていろいろな形で臨むことがあります。イエス様が、ピラトによって殺されたガリラヤ人たちのことについて語られたことを思い起こしてみてください。「ちょうどその時、ある人々がきて、ピラトがガリラヤ人たちの血を流し、それを彼らの犠牲の血に混ぜたこ

とを、イエスに知らせた」(ルカ 13:1)。歴史家ヨセフスの記録によると、その当時、ピラトが数多くの人々を神殿で殺した事実を確認することができます。それらの人々は神様に儀式を捧げる途中神殿で殺されたのです。そのために当時の人々は、このようなことが起きたのは、間違いなく彼らが他の人々よりもっと罪深い人間であったからだと思っていました。

その時、イエス様は言われました。「そこでイエスは答えて言われた、『それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう』」(ルカ 13:2、3)。続くイエス様の言葉に耳を傾けて下さい。「また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」(ルカ 13:4、5)。ガリラヤ人が神殿で殺されたのも、シロアムの塔が倒れて押し殺された人々も、罪を悔い改めていなかったために刑罰を受けて死んだというのが、イエス・キリストの説明でした。



彼らがどのような罪によって刑罰を受けたのか、私たちには分かりません。この話が私たちに与える教訓は、神様の言葉を聞いて悔い改めない者は、誰でも彼らのように最終的には滅ぼされることを、警告することでした。彼らは私たちよりもっとひどい罪人ではなかったのです。しかし彼らは刑罰を受けました。もし私たちも悔い改めなければ、同じようなことが私たちにも臨むのです。目に見える刑罰が私たちの生涯に臨んでいないからといって、私たちが彼らより善人だと錯覚してはなりません。最後の審判の日には必ず、悔い改めていない罪人に対して報復が臨むこととなります。なぜなら、聖書は「罪の支払う報酬は死である」(ローマ 6:23)と言っているからです。

シロアムの塔に押し殺された人々も、神殿で宗教的な行為を行っていた人も、同じような刑罰が臨みました。宗教を持っていてもいなくても、悔い改めない者はみな、このように滅びてしまうというのが聖書の教えです。

皆さんに今、試練や苦痛がありますか？もしかして悔い改めていない罪がないかどうか、注意深く心を探ってみて下さい。神様の憐みの期間が終わって、突如として皆さんの上に、神様の裁きが臨むかもしれないのです。聖書は、クリスチャンであってもなくても、悔い改めない罪人に対して、いずれはその報酬である死と刑罰が臨むことを警告しています。

3

神の栄光を表すために来る苦難

聖書の中に出てくる、生まれつき盲人であった人の話は、苦しみの意味について、別の面があることを私たちに教えてくれます(ヨハネ9:1～34)。この出来事が与える教訓は、罪の問題や悔い改めの問題ではありませんでした。ここでは、神様の摂理やご計画に基づいて苦しみが来る場合があり、苦しみにあっている本人は、信仰を通してその苦痛から解放されるという、驚くべき出来事が語られています。

弟子たちは、彼が盲人になった理由を罪の問題と結びつけました。「先生、この人が生まれつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか？本人ですか？それともその両親ですか？」。その質問に対して、「イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである』(ヨハネ9:3)。その人は、病気で苦しむ者に対して、神様がどんな癒しの奇跡を与えられるのかを見せるために、盲人になることを許されていた人でした。そうして他の人々が、神様の驚くべきみ業を見て、神様の素晴らしさをほめたたえるようになるのでした。

神様は、ご自分の御子であるイエス様が地上での働きを始められた時、その盲人が信仰を持ってイエス様のところにやって来るのを待っておられました。やがてその盲人は、信仰を持ってイエス様の前に進み出て、ついに癒されました。神様の栄光を表す目的のために、目が見えなくなったり、歩けなくなったりした人は、イエス様と出会う時、ただちに癒しを受けることになります。

そうかといって、すべての盲人や足の悪い人が、真実なクリスチャンになれば、癒されるようになるわけではありません。それらの人々に対して、「あなたが癒されていないのは信仰が足りないからです」と言うことは出来ません。ある人が障害をもったまま人生を送り亡くなったからといって、「彼は信仰のない者」と言って

はなりません。なぜなら、私たちは彼らがなぜ障害を持つようになったのか、真の理由が分からないからです。なぜ、神様が彼らの祈りに答えられなかったのか、その意味を知ることには出来ません。従って、神様が全ての秘密を明らかにされる歴史の審判の時が来るまでは、誰も結論を出すことは出来ません。誤った願望を抱いていると、失望に終わることになるかも知れません。どのような状況にあっても、静かに、そして信頼の心を持って神様の導きにゆだねる心こそ、神様に対する最も強力な信仰の証となるのです。

4

あなたを益するために来る苦難

使徒パウロの場合を考えてみると、彼が肉体に持っていた何らかの障害、苦痛は、彼自身の益のために許されていたことが分かります。パウロは忠実な神の僕でした。神様のみ事業の進展のために、立派に用いられた人でした。しかし同時に弱さを持った人間でもありました。神様は、パウロが成し遂げた驚くべき功績や自己犠牲によって、高慢になる危険性を知っておられました。神様はパウロが、自分で自分を高めるだけでなく、他人によって高められる危険があることも知っておられました。それゆえパウロが、「肉体に一つのとげ」を持つことをお許しになりました(2コリント 12:7)。私たちはその「とげ」が何であったか具体的に知ることはできませんが、その「とげ」がパウロを非常に苦しめていたことを知ることができます。

とげが刺さったまま過ごした経験がありますか。小さなとげでも違和感があり不便さを感じます。パウロに与えられた肉体のとげは大きなもので、パウロは三度もその肉体のとげを離れ去らせてくださるように祈りました。しかし神様は、そのとげをパウロの肉体にそのまま残しておくことが、最善であると思われたのです。神様はただ、「わたしの恵みはあなたに対して十分である」と言われました。それゆえそのとげは、パウロの肉体に一生の間そのまま残って、彼に苦痛を与えました。パウロが「サタンの使」と呼んでいたその肉体のとげは、真実な神様の僕の救いのために必要なものとして残されました。

「そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、

むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう」
(Ⅱコリント 12：7～9)。

パウロは神様から直接多くの導きを与えられた使徒でした。そのために彼が高慢になったり、人々も彼を神様の特別な恩寵を受けられた特別な人として扱う危険性がありました。そのような危険を防止するために、神様は彼に肉体のとげをお許しになりました。悲しいことは、高く評価されている人こそ高慢に陥りやすいことです。しかし神様はそのような場合にどのようにすればよいかご存知です。



新約聖書の中で最も多くの記事を書き、弟子の中で最もたくさんの伝道旅行をした、偉大な使徒パウロの祈りさえ答えられないことがありました。ところが、今日の多くの人は、祈りが答えられないのは信仰が欠けているためであると考えがちです。病気をいやして下さるように祈りを捧げても、いやしを受けられないのは信仰が欠けていたり、悔い改めていないためであると決めつけるのは、とても非聖書的なことです。なぜなら、誰もその病人に対して神様がどのような計画をお持ちであるか、知ることができないからです。皆様が心から神様を信じていて、また、神様の愛を心から信頼しているのであれば、起きてきた状況を、神様の摂理とご計画として、あるがまま受け入れる態度が必要なのです。

パウロが、自分自身の肉体の中に刺さっているとげについて聖書に記録した理由は、神様がなぜ私たちに苦痛をお許しになるのかということについて、理由を説明するためでした。神様は私たちが謙遜に低くするためにどのような経験が必要であり、そのような経験がいつ必要とされるかすべてご存じです。ですから、肉体的、精神的な苦しみが襲って来た時、私たちはパウロの言葉を思い出して「パウロのような人にさえ、高慢にならないために肉体にとげが必要とされたのなら、私のように軟弱ですぐ高慢になりやすい者には、肉体のとげがなおさら必要ではないか!」と言えるようにしましょう。

それゆえ苦痛は、私たちに益を与えるためにやって来るものと言えます。高慢は私たちの魂に深い傷をもたらします。多くの場合において、高慢を治療するために神様が用いられる方法は、私たちの肉体にとげをお許しになることです。もちろんそうは言っても、肉体にとげが与えられることは、人にとって有益になる

「わたしは苦しめない前には迷いました。しかし今はみ言葉を守ります。・・・苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」(詩篇 119:67、71)。



こともあれば、そうでない場合もあります。ある人は、そのような経験を通して本当に謙遜な人格を築きますが、ある人は、肉体のとげをお許しになった神様のみ心を受け入れないまま、不平不満の歳月を送ってしまうこともあります。益となるかどうかは、その人の選択にかかっています。しかし、結果がどうであれ、神様は、私たちにとげをお許しになることによって、私たちが天のみ国に入るために必要な、最高のことをして下さったのです。

クリスチャンは試みにあった時、その理由を探り調べてみなければなりません。ところが、何年も過ぎていのに試練に対する満足できる答えが見いだせない場合もあります。そのような時にも、私たちは神様に対する信頼心を見失わないようにしましょう。パウロは彼が生きている間に、肉体のとげが除去されない理由を知ることが出来ましたが、私たちは、イエス様が再臨されるその日まで、私たちが直面している苦痛の理由を、知ることが出来ない場合もあります。ある人は、再臨の日まで、お祈りを通して、自分たちの苦痛や悲しみをすべて理解し、同情して下さるイエス様の慰めを受けることにより耐えなければなりません。イエス様は私たちと同じ肉体をお取りになって、この地上で過ごされる間、私たちと同じような試練や苦痛を経験し、神様だけが与えて下さる慰めと励ましを受けられたので、私たちの祈りに答え、私たちにも同じ慰めと励ましをお与えになることが出来るのです。人として様々な苦難と試みにあわれた方こそ、試みの中にいる者に、真実の慰めと希望を語る事が出来ます。

皆さんは今まさに、苦痛のトンネルの中をとおられるかもしれません。それは皆さんをもっと謙遜で柔和なキリスト者として創り変えるために、苦難という訓練学校に入学されたことなのかもしれません。もう一度心を低くして、なぜそのような苦痛が取り除かれないのか祈ってみてください。

やがて必ず、このように言う日がやってくることでしょう。

「わたしは苦しめない前には迷いました。しかし今はみ言葉を守ります。…苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」(詩篇 119:67, 71)。

5

より良い奉仕をもたらす苦難

苦しいことやつらいことを避けたいと願う人間性にとって、異常に聞こえるかも知れませんが、他の人々のために皆さんが苦痛や病を持つようになることがあります。それは苦痛の中でも、最も神聖な価値のある苦痛です。私たちはそのような苦痛を“代理苦痛(Vicarious Suffering)”と名付けています。

使徒パウロはあらゆる面において、イエス様の足跡に従う僕でした。彼は弟子たちの中で、誰よりも多くの苦難と苦痛を味わい、そのことによって苦しみによってしか得られない価値と教訓を数多く見出した人でした。他の使徒たちは、悩みと苦痛に対して、「忍耐力を持ちなさい」《「忍耐力を十分に働かせるがよい」(ヤコブ 1:4)》と勧告していますが、パウロはさらに進んで、苦しみを味わいなさいと言いました。「望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい」(ローマ 12:12)。「今わたしは、あなたがたのための苦難を喜んで受けており、キリストのからだなる教会のために、キリストの苦しみのなお足りないところを、わたしの肉体をもって補っている」(コロサイ 1:24)。このような言葉を見る時、パウロは、イエス様と非常に類似した経験を持っていることが分かります。イエス様は言われました。「わたしのために人々があなたがたをのしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである」(マタイ 5:11)。また、「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをなされた」(イザヤ 53:4)とされています。

イエス様の苦痛は代理的な苦痛でした。その苦痛は、自分の利益のためではなく、ましてや罪の結果によるものでもなく、全面的に他のためのものでした。イエス様が十字架の肉体的、精神的な苦痛に耐え、あらゆる侮辱や非難を受けられたことも、全て私たちの幸福と救いのためでした。イエス様の全生涯が、他を祝福し天国へ導くためのものだったのです。そしてクリスチャンとは、まさにそのようなお方の足跡につき従う者たちです。



それでは私たちは、どのようにして他人の益のための苦しみにあずかるのでしょうか？他人のために苦しむということなど可能なことでしょうか。パウロは福音を説明しながら、まさしくこの点を強調しました。「ただし、あなたがたは、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから移り行くことのないようにすべきである。この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである。今わたしは、あなたがたのための苦難を喜んで受けており、キリストのからだなる教会のために、キリスト

の苦しみのなのお足りないところを、わたしの肉体をもって補っている。わたしは、神の言を告げひろめる務を、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっているのである。その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。わたしたちはこのキリストを宣べ伝え、知恵をつくしてすべての人を訓戒し、また、すべての人を教えている。それは、彼らがキリストにあって全き者として立つようになるためである。わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである」(コロサイ 1:23～29)。

24節でパウロは「今わたしは、あなたがたのための苦難を喜んで受けており、キリストのからだなる教会のために、キリストの苦しみのなのお足りないところを、わたしの肉体をもって補っている」と、語りました。パウロのこの証しに注目しましょう。パウロは他者のために苦しみを受けていると語り、さらにキリストのからだである教会のために、キリストの苦しみのなのお足りないところを、彼のからだによって補っていると言いました。彼のこのような発言は、「すなわち、キリストとそ

の復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである」(ピリピ3：10、11)という言葉とつながっています。パウロは「苦難にあずかることとその死のさまとひとしく」なることを熱望しました。実は、これこそがイエス様を信じる私たちの生涯における、最高の目標であり、愛の姿なのです。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」(ヨハネ15：13)

パウロは、他人のために苦しみを受けて死ぬという、そのような自分の犠牲や功績が、自分自身の救いを達成することになると信じていた人ではありません。彼は自分の愛する救い主が与えてくださった真理として、苦痛を受けることを喜び、「キリストの苦しみにあずかることがいかに天において祝福されたものであるかを味わい知っていたのでした。パウロは、キリストのように自分も代理的な苦難と死の道を歩むことによって、キリストの心にあった喜びを体験していきました。

苦しみを喜ぶべき理由

コリント教会に送られた二回目の手紙において、パウロは自分の信仰が苦難を通してどのように昇華されたかを述べています。パウロは、苦難の中で神様からいただいた慰めの経験を、他の人にも分け与えたいという熱望で満ちるほどに燃え上がっていきました。それらの経験は、パウロの奉仕において新たな章を開くものでした。彼は自分自身が苦しみを多く受ければ受けるほど、試練や悲しみの中にある人々を、より深く理解し助けることができるようにされることを、悟っていたのでした。イエス様が、苦難を通して他人をどのように助け同情するかを学ばれたように、パウロもまた苦難を通して、他の人々を助けるキリスト者としての資質を整えられたのでした。

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。だから、あなたがたに対していただい

るわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである」(Ⅱコリント1:3~7)。

ここでパウロは、苦難を他の人々の益のために受けたものと描写しています。パウロは他人の慰めと救いのために苦難を受けました。彼は自分自身が受けている苦難を通して、他の人々をより効果的に助けることが出来る者として変えられることを知っていたので、苦難の最中にも関わらず喜ぶことが出来ました。彼は自分が受けている苦痛に心を奪われるよりは、苦痛を通して自分自身がさらに同情心が深くなり、慈悲深い者に変えられていく恵みに対して感謝していました。パウロは、苦痛を通して苦痛の中に耐えている者たちの心情を、より正確に知ることが出来るようになり、さらに有能な伝道者になることが出来たのでした。

苦難は奉仕のために必要な準備の一つの過程です。まさしくその理由のために、キリストは苦痛を受けられました。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル2:18)。

イエス様が、墮落によって弱くなった肉体をお取りになってこの地へ来られたのは、人類に奉仕するためでした。「彼は自分自身、弱さを身に負うているので、無知な迷っている人々を、思いやることができる」(ヘブル5:2)。まさしくこのことのゆえに、キリストは私たちの大祭司であり、仲保者となることが出来たのです。「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源とな」(ヘブル5:8、9)られました。

人間は自分が理解し、体験した範囲の中で他人を助けることができます。闘病生活の経験がない人は、病人の感じるつらさや絶望に対して、同情は出来ても共感することは難しいのです。イエス様は「主はご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル2:18)。イエス様は人類の代表として、人間が直面するあらゆる苦難の頂点を経験された方ですから、他の誰よりも私たちに一番効果的に慰めて下さることが出来るのです。ですからイエス様は、苦難の王様であり、同時に慰めの王様でもあられます。

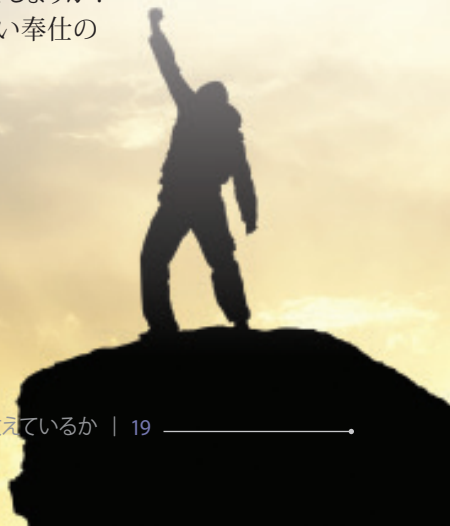
パウロが熱望していたのは、まさしくこの経験でした。彼はキリストが経験されたその方法以外には、他の人々を慈悲深く、恩恵の内に育て上げることができな

いという事実を悟りました。また彼は苦難の経験を通して、キリストと共同の苦難を味わうことを望みました。「すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり」(ピリピ3:10)。このような理由のゆえに、パウロは苦痛の中にあっても喜ぶことが出来、取り去られなかった「肉体のとげ」に対しても、満足することが出来たのでした。

苦痛は特権である

ある人は、キリストと共に苦難にあずかるというようなことを聞くと、負担に思われるかも知れません。もしそうだとすれば、使徒パウロの次の言葉に耳を傾けるべきです。「あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことをも賜わっている。あなたがたは、さきにわたしについて見、今またわたしについて聞いているのと同じ苦闘を、続けているのである」(ピリピ1:29、30)。パウロはここで、苦難はクリスチャンの特権であり賜物であると言っています。クリスチャンにとっては、キリストを信じて救われることも特権ですが、イエス様の真理のために苦難を受ける特権も、同時に受けるのです。苦難をこのような観点から見るクリスチャンが、あまりにも少ないように感じます。もし皆さんが、苦難をこのような観点から見る事が出来るなら、皆さんは真理のゆえに、み名の栄光のために苦難を受けているのですから、あらゆる苦難の中で、神様に喜ばれる者とされているのです。

苦難が分からない人は、真実の人生を知らない人と言えます。苦難を知らない人は、簡単に落胆して、苦しみの中にいる人の心も理解できず、慰めてあげることも出来ません。切り立った崖からまさに落ちそうになった経験がある人だけが、同じような経験を通して人々を理解し、助けてあげることが出来るのです。皆さんは今、何かの問題を抱え、苦痛の中におられるでしょうか？もしそうであるなら、今神様は皆さんを、より良い奉仕のために備えさせておられるのかも知れません。心を謙遜に低めて、神様のみ心が何であるか、祈りながら考えてみてください。



ここまで私たちは、苦痛や病が起こる五つの原因について、聖書からの解答を見てきました。しかし、これまで探ってきた理由は実は特殊な場合であり、大部分の苦痛と病は、直接的にまたは間接的に、神様の律法や自然法則などを犯した結果として起きてきます。多くの場合、人は自分の蒔いたものを刈り取ることであり、苦痛の根本原因は自分自身が提供しているのです。神様が直接手を下して、ノアの洪水を起こされたり、ソドムとゴモラの町を焼き滅ぼされたり、またエジプトのパロの軍勢が紅海で沈められたりする場合もありましたが、そのような時は、神様の明白な目的と正義のもとで行われます。神様の怒りの杯があふれ、滅亡に至ったことが聖書に記されていますが、それは極めてまれであり、たいいの場合、苦痛の原因はその人自身にあります。

従って、たとえば病気が起きた場合、まず自分が神様の律法や自然法則の中で、どれを犯してしまったか慎重に調べ、過ちを犯したことを真実に悔い改めて、改革しなければなりません。このような態度こそ健全な常識であり、正しい信仰姿勢です。ここでの律法とは、神様と人に対する愛の道德律であり、それは命の法則として、従えば生きて、破る者は死ぬことになる鉄則を意味します。

自然法則というのは、魚が水の中では生きられても、水の外に出ると死ぬことになると言うようなもので、昔からある健康の教えや、科学的な健康原則なども含まれます。高圧線に触れれば死ぬということを知っている人が、故意に高圧線に触って死んだ場合、私たちはその人の死に対する責任を神様に負わせることは出来ません。また、ある人が毒キノコを食べるなら、その人は自分の浅はかな行動の代価を支払うことになります。このような命の法則は私たちがそれを無視した場合には、必ず、その代価を支払うように要求されます。それと同じように、健康の原則を破った生活をし続けることも、やがてその結果を刈り取ることになるのです。

健康の原則を破ったからといって、すぐさま代価を支払うようになるわけではありません。しかし何年後かには必ずその結果を受けとるようになるのです。ある人が20代から不摂生をしていたならば、40代あるいは50代になってからその結果として、癌や心臓病、脳血管障害などの病気が起きることになります。多くの人々は、自分自身が悪い種を蒔いておきながら、自分だけは悪い結果が起きてこないだろうと、漠然とした期待を持っていますが、それは幻影です。

この世が存在する限り、神様がこの世に立てられた自然法則は存在しており、人はその結果を自分自身で刈り取らなければなりません。

神様の律法もこれと同じです。神様の律法である十戒も、決して変更したり、廃することができない宇宙の法則です。ある人々はイエス・キリストの愛を信じるなら、これ以上律法を守る必要はなく、律法は廃止されたのだと主張します。しかし、イエス様は「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」(マタイ5：17、18)と言われました。自然法則に従わない時、病気や苦痛に直面したり、命が失われることになるように、神様の律法を犯した場合にも、それに対する代価を必ず支払わなければいけません。聖書はその代価を「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6：23)と宣言しています。

律法を犯しながら生涯を送る人たちは、結局は地獄の刑罰を受けることになりませんが、この世で生きている間にも、その結果を受けることがあります。たとえば、『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』という戒めを犯す人の心には、赦しの精神が消えてしまいます。憎しみと恨みの精神がその人を支配することになります。その結果、ストレスのために、血圧が高くなり、心臓には負担がかかり、結局は各種の病と苦痛がその人自身を訪ねてくることになります。

神様が不快に思われるような生涯を過ごしている人の中には、一見何事もなく穏やかで、刑罰や問題が生じないこともあります。そのような人々は、自分が望む通り食べたり、飲んだり、めとりとつぎなどした後、やがて致命的な問題が起きるまで自分の道を楽しむかもしれません。ノアの時代にも、神様の怒りや不快を表すようなどんな現象もなく、120年が過ぎた時に、いきなり洪水が押し寄せてきました。快樂と自己中心的な生涯を送っている人々に、今現在は何か特別な懲らしめが





ないように見えるかも知れませんが、罪の杯が満ちた瞬間、彼らは取り返しのつかない苦痛と苦悩の経験を持つこととなります。

かりに真実なクリスチャンであったとしても、神様の律法や自然法則に不従順であれば、それに該当する結果を受けなければなりません。たとえば、熱心に働く者だけがよい収穫を得るということは自然法則です。ですから熱心に働くこともしないで、お祈りだけして、良い実と結果を期待してはいけません。またクリスチャンも、不信仰者たちと同じく遺伝の法則に基づいて、病弱な遺伝因子を親からゆずり受けることがあります。

また彼らも事故にあい、不信仰者と同じ病気にかかって死にます。それでは、肉体的な面から見た場合、クリスチャンが受ける苦痛と、不信仰者たちが受ける苦痛には何か違いがあるのでしょうか？

この質問はとても慎重に扱われるべきものです。前に述べたように、神様は人類すべてに、同一の自然法則を与えられました。従って、クリスチャンの苦痛と不信仰者の苦痛のあいだに、目に見える何かの相違があるわけではありません。あるとすれば、それはそれぞれが、どんな反応や態度を示すかということであって、神様が一人ひとりに適用される自然法則に、違いがあるわけではありません。ですから、この世に生きている誰も、その生涯に起きてくる災難や苦痛から逃れることは出来ませんが、それらの問題を受け止める態度と、それがもたらす結果は人によって大きく異なることとなります。

真実なクリスチャンは、神様の摂理とご計画に信頼することによって苦難に打ち勝ちます。神様が許されることであれば、どんなことでも益となるという、絶対的な信頼と信仰を持ち続け、苦難の中にあっても心の深い所で平安をいただくことが出来ます。そのような深い霊的体験を通して、いっそう高潔なキリスト者として

の品性を受けることとなります。

もちろん、このように信仰によって生きている人であっても、自然法則に従って起きる苦痛が軽減されるわけではありません。神様は、すべての人に同じ自然法則を適用させておられます。しかし、神様を心から信頼するご自身の民には、目に見えない特別な霊的原則を適用させて下さいます。神様は、信仰によってご自分の前に進み出る全ての人々に、この霊的な法則に従って、心に勇気を与え、耐えられる力を提供して下さいます。神様の愛はすべての人に、何の条件もなく与えられていますが、神様の癒しの力は、信仰を持ってその方のもとへ行くことを条件に、提供されているのです。

あなたは今、何らかの苦痛や病気を持っていますか？まず、皆さんの心と生活の中で、何か神様の法則が犯されていないか注意して調べてみてください。そして、神様が聖霊を通して皆さんの罪や過ちを指摘して下さいたら、直ちに悔い改め、過ちを改革して下さい。そうしてすべての結果については神様にゆだねて下さい。これこそが、皆さんが暗い苦痛のトンネルを通過できる秘訣なのです。



第2部

愛する人を亡くされた方のために

内村鑑三著 『キリスト信徒の慰め』より翻案・現代語訳

(文責: SOSTVJapan Mission 編集部)

妻の死

私たち命を持っている者は皆、死が避けられない運命であり、生物界が永続するためには必要であるという事実を知っています。昔の英雄たちは勇気ある姿で、また感謝の心で世を去りました。私もそのようでありたいと思っています。そこで、以前私は、家族を死によって失った遺族を慰める時、彼らが私の語る信仰の言葉によって気力を回復しないとすれば、私は彼らの信仰の薄さに対して嘆息し、死に対する理解に欠けていることを心ひそかにたしなめていました。



クリスチャンであるならば、宗教の助けがあり、復活の望みがあるわけですから、死を堂々と受け止めるべきではありませんか!もし私の愛する人が死の淵にいるならば、私は彼の枕元に行って、賛美歌を歌い、聖書を朗読し、以前彼が両親の安否を知るために帰郷する際、賛美と祈りで送り出し、一時的な別れは寂しくても、また会う日を楽しみにして彼を見送った時のように、雄々しく彼の死出の旅を見送るのだと思っていました。

私は聖書的にも科学的にも、人が死ぬべきものであるという道理をわきまえています。ところが、いざ、私の愛する妻が世を去った時、初めて私はその深さ、痛み、悲しさ、そうして苦しみを切に感じるようになりました。生命は愛ですから、愛する者を亡くすことは私自身を失うことでした。愛が私と共にあった時、回りのすべてのものは意味がありました。けれども、愛が私のそばを離れ去った今は、すべてが光を失い、意味までも失われてしまいました。

私の苦痛の理由

愛する人を亡くしたことから来る苦痛は、この世を失うことで終わりませんでした。この世はいずれ去っていかねばならない所ですから、今日終わっても、30年後に終わっても本質的な違いはありません。しかし、私の心血を注いだ毎晩の祈りも神様の御座を動かすことが出来ず(自分の考えでしたが)、私の全身全霊をかけた願い、私の命に変えても彼女を癒してほしいという真心からの願いも、全く通じなかったという事実の前に、私は懐疑心という悪魔にとらわれてしまいました。私の信仰は、その土台を失ってしまったのです。私はキリスト教の神様を信じたことを後悔しました。私が神様を愛の方として理解していなかったならば、これほどの苦痛はなかったことでしょう。そのお方に対する愛情と信頼がなかったならば、このような落胆はなかったはずでした。血を吐くほどの私の祈りを無視した神様を、どうやって愛と慈しみの神様として信じることができるでしょうか？

医者は私の体を心配して安定剤と睡眠剤を勧めてくれました。しかし、どのようなものが私の心の痛みを取り去ってくれるのでしょうか。友人は転地療法や旅行を勧めてくれましたが、自然は今では敵となってしまいました。冷静な理性によって死を受け入れようとしても、考え方を換え、積極思考をしようとしても出来ませんでした。牧師の慰めも、友人たちの勧めも、何の役にも立たないばかりか、うっとうしいとしか思えませんでした。私はまるで怒った熊のように「私の愛する者を返してくれ!」と叫ぶほか、言葉がありませんでした。



もちろん、私は信じます。私の救い主は、死から復活されたことを信じます。私の妻も、同じように救い主が来られる時に、再び復活して再会できることを信じます。私の悲しみは、妻の死そのものではありませんでした。私の問題は「なぜ神様は、私の祈りを聞き入れてくださらなかったのか?」ということでした。神様は、科学者や医者が言う、命と死の法則を克服することができない方なののでしょうか?宇宙の創造主であり、王様であられる神様に祈っても、何の意味もなかったのはなぜでしょうか?私の祈りに熱心と真心が足りなかったせいでしょうか?それとも、私の罪が重かったので、私の望みを聞き入れて下さらなかったのでしょうか?それとも、

神様は私を罰するために『妻の死』という不幸を私に下さったのでしょうか？まさしくこのことが、私が知りたいことでした。このことが理解出来るなら、私の信仰はすぐに回復され、生命力を得ることになるでしょう。

回復への道

第一の段階

この時、私の心の中に一つの小さい声が聞こえてきました。「自然の法則は神様のみ心である。死は神様がその愛する子供を呼ぶ時に用いられる一つの方法である」。私の愛する者を生かすことが神様のみ心であったなら、神様はご自身が定められた自然法則に従って妻を生かされたことでしょう。クリスチャンはこのような事実によって神様に感謝します。不信仰者は癒しと回復を医薬の効果、医者技術力の高さと評価しますが、神様を知る者は神様の善なる意図にすべてをゆだね信頼します。

第二の段階

次に悪魔は、私にこのような考えをもたらしました。「結局、神様のみ心のままにすべてが成し遂げられるのであれば、祈りは何のためにするのか？」と。これは難しい質問です。神様は私たちの祈りを聞いて、それに従って雨を降らせたり雪を降らせたりされるのではないのですから、なぜ祈らなければならないのでしょうか？中世期のクリスチャンたちが、ししの穴と迫害から免れさせて下さるように祈ったのに、神様は彼らに耐え難い患難をお許しになり、命を取られました。そうであるなら、祈ることにどんな意味があるのでしょうか？いっそのこと、最初から祈ることを放棄して、ただ神様のみ心と命令が成し遂げられていくのを、ただじっと待つことが賢明なのではないのでしょうか？いったい祈る必要がどこにあるのでしょうか？

妻を亡くした後、私は何カ月もの間祈れませんでした。以前は、お祈りしないで箸を取るなどあり得なかった私が、お祈りしないで寝床に入ることはなかった私が、妻を亡くした後では、神様なしで過ごす人になり、恨みの心で食膳に向かい、涙で寝床に就く身になってしまいました。その当時、苦痛の中で私が神様に捧げた訴えは、このようなものでした。「ああ！神様、私のこの言葉をお赦してください。あなたは、あなたの子供を傷つけられました。私の魂の痛みのために、あなたの前に近づくことができません。私があなたに祈らないからといって、捨てることはなさらないでしょう？いいえ、楽しい心で祈っていた時よりも、全く祈りができな

い今、あなたは以前にも増して私に愛と慰めを下さるでしょう。私があなたに祈ることが出来た時には、あなたの特別な恵みと慰めを必要としませんでした。私が祈ることができない今こそ、あなたの憐れみを最も切実に必要とする時です。愛する妻を亡くして、宇宙の漂流者となった今こそ、私が極度の失望に陥って神様を捨てようとしている今こそ、あなたは無限の愛を私に示し、私の後ろを追ってきて、私があなたを離れて行かないようにして下さいませね!」。

しかし時がたつにつれ、ついに私はこのように祈ることが出来るようになりました。「そうです、神様!私の祈りは無駄ではありませんでした。十年一日のように、朝に夕に神様に祈ってきたことで、妻を亡くした後、私は思いもよらない神様からの喜びと慰めを得ることになりました。ああ神様、感謝いたします。神様は私の祈りをお聞き下さいました。以前私はこの世の幸福のために祈りませんでした。イエス様が教えられたように、肉のために祈らず霊のために祈りました。もし、肉のために必要なものがあって祈る場合は『神様のみ心にかないますなら』という言葉を付け加えていました。私は、自分の願いを叶えて下されば信じ、聞いて下さらない時は恨むような態度は、偶像に願をかけているのと同じことで、キリストを信じる者の態度ではないことを知っています。ですから、私はどうして祈りを止めることができるのでしょうか。神様、私は今晚からは以前よりもさらに熱心にあなたへ祈りを捧げます」。

第三の段階

この時、悪魔がまた私にささやきました。「お前は熱烈な祈りで不治と言われた病人が癒された例を知っているだろう。お前の祈りが聞かれなかったのは、お前の熱誠が足りなかったせいだ!」。もしこれが事実なら、妻を死なせたことは、私の愛情が足りなかったからということになります。それでは、妻を死なせた罪は私にあります。私は愛する人を殺した者です。もし熱心が病気の人を癒せるのであれば、そのような熱心さを持ってない人は哀れな存在です。

私は私の信仰の足りなさを知っています。しかし、私は私の熱意を尽くして祈りました。それにもかかわらず私の妻は亡くなりました。誰かが、私の熱心が足りなかったからだと言っているのなら、私はその人に、「私は真心をすべて尽くしました」と、はっきりと言うことができます。神様は私たちが持っていないものを要求されることはありません。私は熱心の限りを尽くして祈りましたが、それにも関わら

ず、神様は私の愛する者を取り去られました。

天のお父様、私は信じます。私には分かります。もしも、あなたに対する私の信仰が、妻の死によって完全に消え去るようなものだったら、あなたは間違いなく私の祈りを聞き、妻を生かして下さったことでしょう。神様が妻の死を許されたことは、私の信仰を知っておられたためでした。そうです、あなたは私がこの試練を十分に耐えることができると見て下さいました。そのために自然の法則に従って、家内の死を許されたのでした。それは、私の熱心が不足したからではなく、むしろ神様の恵みによって与えられた、私の熱心と信仰が十分だったからこそ、このような苦痛をお許しになったのです。ああ、天のお父様、感謝します。神様は私の信仰を認めて下さいました。私は何と幸いなものでしょう。

第四の段階

ところが悪魔はもう一度、このようにささやきました。「お前の信じる神が本当に愛であるなら、どうしてお前にこんな苦しみと悲しみを与えるのか?」。天のお父様は、悪魔に答えるために次のような心を与えて下さいました。「悪魔よ、私は神様が私たちを罰するために苦痛を与えるという、ある牧師たちの教えを信じない。聖書には世の人々が言うような“刑罰”はない。刑罰という言葉は、法律の用語ではあっても、キリスト教においては、必要もなく意味もない単語である。聖書的にこの言葉を理解しようとするなら、それは、『暗く見える神様の恵みなのだ』。刑罰も神様の恵みであり、地獄の炎でさえも、悪人と義人すべてに対する神様の愛なのだ。善と義を憎む悪人を永遠に存在させておいたとしても、それが彼らにとって何の益になるだろうか?殺人、強姦、賭博、憎しみと怒りの心を持ったまま、悪人同士が永遠に存在することがどうして愛と言えるだろうか。地獄の炎で悪人の存在を滅亡させ、宇宙から悪が根絶させられることで、全宇宙が安全に永遠の幸福を受けられることこそ、神様の真の愛であり、真の知恵なのだ。私は、地獄の炎の中にさえ表れている神様の愛を信じる。神様は本当に愛の神様である!」

第五の段階

悪魔は最後に、一つの疑惑を私の心に植え付けようとしてきました。「お前の妻はあんなにも短命でよかったのか?彼女は純潔な心の持ち主で、自分を捨てて人のために尽くし、息が絶えるその瞬間まで貧しさで戦い、聖書の真理を守るためにひどい苦痛を受けたのではないか。なぜ彼女は、一生の間ただ一度も安楽な生活を送ることができなくて、あんなにも早く逝ってしまったのか?お前の信じている神は、実は苛酷な方ではないのか?」。

本当に、黙って見過ごしにすることのできない疑惑です。妻の死という、この理解できない事実の中で、いったいどこに神様の御心があるのでしょうか？聖書には、「(神様を畏敬する)彼らにのみこの地は授けられ」(ヨブ 1 5 : 1 9)とされています。それなのに、あれほど神様を愛していた妻が、この世を楽しむことも出来ずに逝ったのはなぜでしょうか？ブラジルの地中に隠されているダイヤモンドは、誰のために造られたのでしょうか？罪のない民衆を虐げ、真理を軽蔑する女王たちの頭や首、腕には金や宝石が掛けられています。一生の間、忠誠と犠牲の人生を送った妻の体には、継ぎはぎの布がかかっているだけです。この地は、悪魔の後を追う者たちのために造られたとでもいうのでしょうか？朝早くから夜遅くまで、助けを求める人や、貧しい人たちの世話をしてきた妻は、ただ一度の楽しみも受けないままに逝ってしまいましたが、悪魔の子らは依然として生き続けており、神様が創造された美しい地球環境を楽しんでいます。まるでこの地は悪魔とその子らのためにあるのだと、言っているようなものではないでしょうか？

この深遠な疑惑には、ただ二つの答えしかありません。一つは神様は存在しないということ、もう一つは、今現在の地球より、もっと良い世界が正しい人のために用意されているということです。最初の答えには問題があります。なぜなら、もし神様がおられないとするなら、真理もないということになり、真理がなければ宇宙を支配する法則もなく、法則がなければ私も宇宙も、存在する道理がないからで



す。それですから、私自身が存在する限り、天と地が私の前に存在する限り、私は神様がおられないと信じることは出来ません。

次の答えに、私を満足させる真理があります。そうです！聖書はイエス様が再臨された後の千年以降には、この地球の上に、義人たちだけが住む新しい世界が広がると教えているのです。最終的にこの地球は、義人たちの手に与えられます。その日には、新しい天と新しい地が、永遠にわたって主人となる義人たちに渡されるのです。ですから義人たちは、苦しみと悲しみを耐えてその日を待ちさえすればよいのです。

この世には二つの美しさがあります。一つは金やダイヤモンドで飾られた美しさであり、もう一つは正直と真実で装われた美しさです。悪人たちはペルシアの真珠を求め、オフルの黄金を求めますが、義人たちは柔和と謙遜で織られた義の衣を求めます。「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべきである。これこそ、神のみまえに、きわめて尊いものである」（Iペテロ3：3、4）。

地球のあちらこちらに埋もれている金銀は、それを得るために造られたものではなく、実は捨てるために造られたものです。それらを得ようとしてあくせくする者は、地獄の炎を迎えることとなりますが、捨てる者は、結局それを受けることになるでしょう。天のエルサレムの真珠の門に入りたいと願う者は、天の都の金で造られた道を歩きたいと願う者は、結局それを得るようになるでしょう。そのためには、この世で真珠と金を捨てる経験をしなければなりません。美しい真珠と金を捨てる経験をしなければならぬために、この世は試練の場所となります。この世を生きる間、心の奥底にある動機まで、金銀に対する試みを受けなければなりません。そして、心からこの世に属するすべてを捨てた者だけが、この世を真理の中で自由に生きることが出来、その結果として、この世のすべてを得ることが出来ます。まさしくこれが、キリスト教が持っている逆説的な真理です。私の愛する妻が耐えてきた苦痛と試練も、同じようにこの真理の公式に基づいて理解することができます。





私を回復される神様

妻のことを思い出すたびに、私の心が締めつけられるような痛みと後悔があります。彼女が生きていた頃、彼女の愛を当たり前のことと思い、時には彼女の微笑みに対して不快な顔で答えたり、彼女の犠牲に対して十分な感謝を表さなかったことが、いまだに私を苦しめています。特に、彼女が病気になって私に慰めを求めてきた時、私は自分が看病で何ヶ月間か身も心も疲れ切っていたとはいえ、彼女の軟弱さを叱り、荒い言葉で言い返しました。彼女はいつも私に対して柔順であり真心を尽くしてくれましたが、私は時々、冷たくあしらひ、誠実ではありませんでした。そのことを思い出すと、私は天にも地にも恥ずかしい思いでいっぱいになります。報いを受けるはずの彼女はすでに世を去りました。赦しを求めてもその人はおらず、胸を打って悔いても、どうすることもできません。私は取り返しのつかない後悔に苦しめられ、永遠の地獄の火で焼かれるような責め苦を受けています。



ある日、私は彼女の墓を訪ねて、塵を払い花を手向けてお祈りをしようとしていました。その時、小さな声を聞きました。それが神様の声なのか、彼女の声なのか分かりませんが、その声がこうささやきました。「あなたはなぜ愛しい人のゆえに泣くのか？あなたは今も彼女に償う機会と時間を持っているのではないか。彼女があなたに誠実を尽くしたことは、何かの報いを受けるためではなかった。それはあなたに尽くす真心と犠牲を通して、あなたが心を翻し、神様とこの国のために全身全霊で尽くすようになるためだったのだ」

「それだから、もしあなたが心から妻の犠牲と愛に報いたいと願うなら、あなたの隣人と国民へ真理を教えて奉仕しなさい。家が無くて道端をさまよう老婦人は私である。私に尽くそうと思うなら彼女に心を尽くしなさい。貧しさのために身を恥辱と金で売る哀れな少女は、私である。私に報いたいと思うなら、彼女を救いなさい。早くから父母と別れ、頼る人もなく苦勞している少女は私である。あなたが彼女を慰めるなら、あなたの妻と私を慰めることである。いつまでも悲嘆と後悔に浸っていても無益である。早くあなたの家に帰り、志を高くして、愛と善行に励み、神の国に来た時には、多くの勝ち取った魂と共に入り、主と私を喜ばせなさい！」

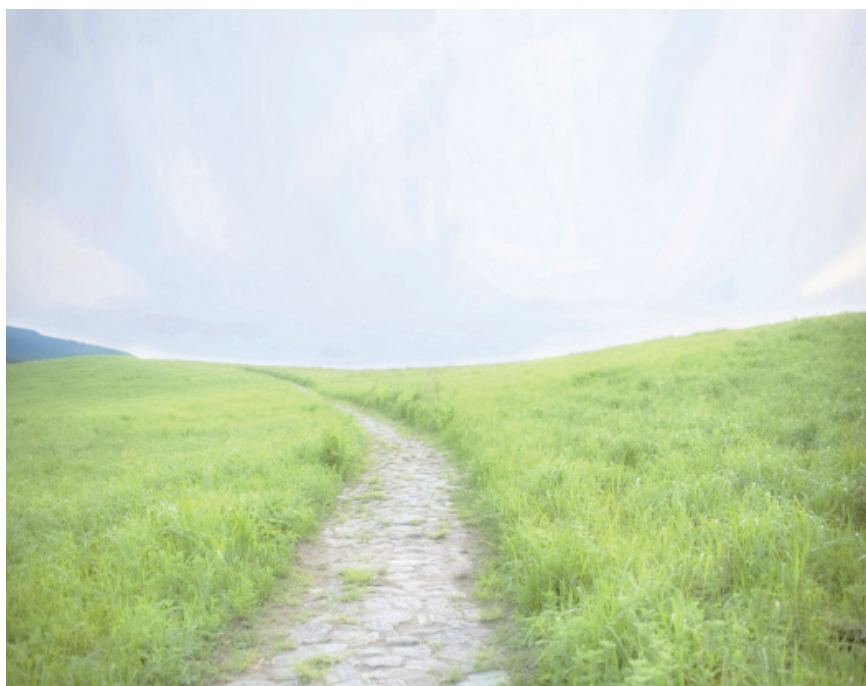
私は妻の墓をスマイレやバラの花で飾ることによって、私自身が慰めを受けようとしていました。しかし今は、妻の墓前に、真実の隣人愛という香を捧げようと思いました。妻の死を通して、私は以前にもまして、貧しく可哀想な人々を愛するようになりました。

詩人シラーが言った、「勇者は独り立つ時最も強くなる」という言葉が思い浮かびます。メアリー・モーファド女史が亡くなった後、探検家リビングストンは、暗黒大陸アフリカのさらに奥地へと入って行きました。私も同じように、妻の死の後、真理の調和をますます深く理解するようになり、神様をさらに身近に感じるようになりました。もし愛の神様がおられて、勇者をいっそう強くされようとするなら、その愛する者を取り去ることにまさる良い方法はないのです。

私は愛する妻の死によって、国も宇宙も、一時は信仰さえも失いかけてました。しかしもう一度信仰を回復した時には、国を愛する心はさらに強くなり、宇宙はいっそう美と荘厳さを加え、神様はもっと身近な方となりました。私の愛する者の肉体はなくなりましたが、心は今まで以上に深く結びつきました。思いがけないことに、本当の一致は、彼女がいなくなった後にやってきたのです。

結局私は、何一つ失ったものはなく、全てを得ることになりました。神様は存在され、彼女も存在し、国も存在し、自然も存在します。私にとって、すべてのものは彼女がいなくなったことによって、全く新しい実在となったのです。

そればかりではなく、私は天国と親戚になりました。天国には親戚がいるのです。私もまた、いつかこの涙の世を去り、地上の務めを終えて眠りにつきますが、それは未知の異郷に行くものではありません。かつて彼女がこの世にいた時には、一日の苦勞を彼女と語り合って忘れるために家路を急ぎました。そのように、残された人生の戦いも、彼女ともう一度会う時を楽しみにして、信仰の戦いを立派に戦い抜き、心嬉しく死を迎えたいものです。



罪思い出さず 涙の夜よ行け
笑みと感謝の朝を われは待てり
われは病みて裸 目に光なけれど
ただ君見上げつつ われ行かまし

地の宝・快樂 見るだにいとわし
ただ慕いまつるは 主の十字架
嵐よ 速く行け 安きよ 来れ疾く
彼方の光へと われ行かまし

主のよみし給わぬ 手の業われ捨てん
主の御心にのみ われ従わん
古きわが身ならで 主と共に死したる
新たなる姿に われ行かまし
(聖歌 4 2 2 番)



SOSTV Japan Mission 紹介



1. sostvjp.net

聖書研究用書籍、BibleNavi小冊子(32シリーズ)、インターネット説教、ブログ、SNS、書籍を多数揃えています。(今後も、料理番組、預言セミナー、ダニエル書、黙示録研究書籍、信仰書籍、月刊誌などをご用意する予定です。)

2. 書籍



聖所



手遅れになる
前に



福音の力を
体験せよ



Remember
Me



新生への道



信仰の
リバイバル

3. YouTube <JAPAN SOSTV>

SOSTVジャパンミッションの礼拝用説教、ショートメッセージ、聖書セミナー、聖書研究、預言研究の動画等をご覧になります。



SOSTVジャパンミッションのすべての資料は無料でお届けしております。
この時代に真理の教えを祈り求めておられる皆様、いつでもこちらの電話番号やメールアドレスにご連絡くださり、資料をご請求いただければ幸いです。

TEL: 050-1141-2318 E-mail: sostvjapan@outlook.com



SOSTV WORLD

日本	050-1141-2318, sostvjapan@outlook.com
韓国	1544-0091, sostvkr@hotmail.com
中国	sostvnet@hushmail.com
アメリカ	1-320-500-1004, sostvus@hotmail.com P.O.Box 787 Commerce, GA 30529
ニュージーランド	0800-42-3004(フリーダイヤル), 649-420-2556, sostvnz@gmail.com
オーストラリア	0425-284-718 sostvau@hotmail.com



SOSTVにご支援を希望されますか？

SOSTVは、読者の皆さんの後援で運営されている宣教ミニストリーです。皆さんの真心からお贈りくださる尊い献金は、より多くの方々に真理をお届けするために、大切に、また慎重に用いさせていただくことをお約束いたします。冊子をご覧になり、心に感銘を受けられた方は、次の口座に後援のほどをよろしく願いいたします。

【後援案内・振り込み先】

ゆうちょ銀行
記号 10570
番号 48323841
名称 SOSTV ジャパン ミッション

(他銀行からの振込み)

ゆうちょ銀行
店名 〇五八
店番 058
預金種目 普通預金
口座番号 4832384
支店名 大多喜郵便局

sostvjp.net

Save Our Souls



ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれている

ように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救のためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。だから、あなたがたに対していただいているわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである。

(Ⅱ コリント1:3-7)

